

## B. Malinowski の文化論とスポーツ

岡 田 猛

### B. Malinowski's Theory of Culture and Sports

Takeshi OKADA

#### 目 次

- I 緒 言
- II 機能主義
  - 1) 機能の概念レベル
  - 2) Malinowski の機能概念
- III 文化論
  - 1) 文化の定義
  - 2) 生命活動系列
  - 3) 生命活動系列の文化的再定義
    - 基本的要求と文化的反応 —
  - 4) 道具的至上命令
  - 5) 「制度」カテゴリーについて
- IV スポーツ文化論

#### I

体育社会学の研究領域として、体育・スポーツの文化社会学的研究があげられている。例えば、我が国で初めて体育社会学の構想を提示した竹之下は、「集団社会学的角度からの問題」、「社会変動と体育」、「社会問題と体育」に加えて、「文化社会学的角度からの問題」をその研究領域としてあげている。<sup>1)</sup> 爾来、なんらかの形で体育社会学を体系的に論述した著書においては、この分野への関心は継承されてきている。<sup>2)</sup> また、J. Huizinga, R. Caillois のプレイ論にもとづくスポーツ論の展開も活発になされてきているが、<sup>3)</sup> これもこの研究領域に含めて考えてよいであろう。

それらを内容について概観してみるならば、学校体育の学習指導論にかかわる、内容・教材の特性論的アプローチ、社会生活におけるスポーツの存在態様と機能にかかわる生活機能的レベル、等々、多様な展開を示してきたといえるであろう。

しかしながら、その際、スポーツは果して文化であるといえるのか、もしいえるとすればどのような論拠でもっていえるのか、そしてそれは他の文化とどのような関係にあり、それ自体どのような文化的構造を有しているのか、についての論証は等閑に付されてきた。一・二の例外を除いて

は、<sup>4)</sup> R. Linton<sup>5)</sup> などの代表的学者の抽象的・代表的文化概念が形式的に引用されるだけで、文化理論を総体的に把握し、そこからスポーツの文化的特性へと内的に調理を展開するという作業は素通りされてきた。このような作業は、体育・スポーツと文化の問題を論じようとする時には、いわば出発点をなすものであるが、それが以上の如き状況にあることは、どのような理由によるのであろうか。

佐伯は、体育が文化として認識されてこなかった理由を、体育に関する文化的な研究の出発が遅かったことに加えて、身心二元論にもとづく戦前の体育と文化に対する考え方の影響の大きさに求めている。<sup>6)</sup> もともと、日本にあってはドイツの影響が強く、文化概念も、「生の哲学」にもとづく精神的過程、所産としての価値観念の意味づけがそのまま持ち込まれたことによって、必ずしも日本人の価値観からして正当に評価されていたとはいえないスポーツが文化であるなどという考えが受け入れられにくかったという外的な事情が考えられるだろう。しかし体育社会学での内部的事情もみのがすわけにはいかない。それは、学問内部での正しい意味での、研究者の研究内容についての分化、専門化がなされてこなかったということである。このことについては、かつて影山も体育社会学研究20年を回顧して、「よく考えてみると、皆が同じような研究をしているような気がしてならない」<sup>7)</sup>と述べているところである。事実、体育社会学研究会より1972年以来年刊で出されている機関誌において、多くの異なった特集テーマ論文に同著者名がみられるが、このよう事は他の学問ではあまりみられないことである。もち論、研究のあり方として、極度の分化に対して総合化の必要が叫ばれているように、あしき専門主義におちいつてはならないが、しかし、体育雑誌によくみられる巻頭論文著者の常連化といった傾向は是正されていく必要があるであろう。

「体育・スポーツの文化社会学的研究」で、その文化性を論理的に証明することは、いわば出発点であるといえるのに、それが等閑に付されてきたことについては、以上のような事情が考えられる。遅きに失した感もあるが、「体育・スポーツの文化社会学的研究」の出発点といえるこの基礎的作業を開始しようと思う。今回は、機能主義的文化理論の代表と目される B. Malinowski<sup>8)</sup> をとりあげ、彼の理論の最後の集大成といえる著書「A Scientific Theory of Culture and Other Essays」<sup>9)</sup> によって、スポーツの文化論的理解をすすめていくことにする。

#### 注

- 1) 竹之下休蔵：社会学的研究法，日本体育学会編 体育学研究法，杏林書院 pp. 297～349 昭和32年
- 2) 現代保健体育学大系3 体育社会学（大修館書店，1972），体育社会学入門（大修館書店，1975）においても、「体育の文化」，「体育と文化」として一章をさいている。
- 3) 例えば次の研究がある。  
大橋美勝：文化としてのプレイの概念について 東京教育大修士論文 昭和45年  
竹之下休蔵：プレイ・スポーツ・体育論 大修館書店 1972  
永島淳正：プレイ論による体育科学習指導論の試み，体育社会学研究 道和書院 pp. 283～301 1974
- 4) 例えば，高部岩雄の「運動文化論序説」—浅井浅一編 体育学論叢 (1) 日本辞書株式会社 昭和45年 所収—は，それまでの文化概念から「文化の条件」として，「人間の知的，精神的作用の所産である」，「社

会的なものである」の2点を抽出し、それぞれについてスポーツの文化的資格を検定し、検証した。また筆者は、東京教育大修士論文（昭和48年）「文化の一構成要素としてのスポーツの社会学的考察」において、学習、シンボル、社会的存在、機能、統合性の観点からスポーツの文化性を検討した。

その他、スポーツの文化性を論じたものに外国では次のものがある。

A. S. Daniels : "Sport and Human Relations" in E. Jokl & E. Simon (eds) *International Research in Sport and Physical Education* Thomas pp. 23~30, 1964.

A. S. Daniels : "The Study of Sport as an Element of the Culture" in *International Review of Sport Sociology* vol. 1 pp. 153~165, 1966.

F. S. Frederickson : "Sports and the Cultures of Man" in John W. Loy & G. S. Kenyon (eds) *Sport, Culture and Society* Macmillan pp. 87~100, 1969.

René Maheu : "Sport and Culture" in G. H. Sage (ed) *Sport and American Society* Addison-Wesley Publishing Company pp. 386~397, 1970.

5) R. Linton : *The Cultural Background of Personality* Prentice-Hall, 1945.

6) 佐伯聡夫 : 体育と文化 前注2) 体育社会学入門 pp. 26~27

7) 影山健 : 体育社会学研究の20年 体育の科学 vol. 19. 杏林書院 p. 721. 1969.

8) Bronislaw Kasper Malinowski, 1884-1942. ポーランド生まれの文化人類学者。初め物理学と数学を学んだが、Frazerの「金枝篇」を読み、ライプチヒ大学で W. Wundt の影響を強く受けて文化人類学に転向した。その後、第二の郷国となったイギリスに渡り、旺盛な研究活動を展開した。研究内容は、トロブリアド島民を中心とした画期的な民族誌的現地調査、それにもとづく理論的研究におよぶ。

9) *A Scientific Theory of Culture and Other Essays* : The University of North Carolina Press, 1944.

出版年からもわかるように、本書は Malinowski の遺稿である。彼の多彩な実地調査に比して必ずしも評価の不高い理論研究分野での、最後の大成が本書であるといえる。Malinowski 夫人により編集を依頼された H. Cairns の言によると、本書には「人類学史上最も優秀有力な一人の学者のきわめて重要な問題領域に関する熟成した見解が提示されている」。姫岡勤、上子武次訳「マリノフスキー文化の科学的理論」岩波書店 p. iii 昭和33年。なお、以下の引用訳文は筆者によるものであるが、その際、同上訳書をおおいに参考にさせていただいた。ここに記して感謝の意を表しておきたい。

## II

Malinowski 自身、自認しているように、彼は「機能主義的」文化論者である。したがって彼の文化理論の解明において「機能 (function)」ないし「機能主義 (functionalism)」についての理解は不可欠であるといわなければならない。本章では機能についての一般的概念を概観し、彼の機能概念を析出することによって、文化理論解明への橋わたしとしたい。

1) 一般に機能とは、「はたらき、作用」と考えられている。コトバの機能は意志の伝達である、というのがごときである。しかしその使われ方は おおよそ 三つのレベルに分類することができる。第一は、一つの単位の活動を指すにとどまる場合である。例えば、ある地位 (status) の占有者としての役割 (role) のごときである。しかし、この機能概念はあまりに広すぎるために、分析道具として意識的に用いられる場合にはこの使用法は避けられてきた。第二のレベルは、例えば、

生活水準の上昇と出産率の低下との関係のごとく、変数間の共変 (co-variation) 関係を指す場合である。最後に第三のレベルは、生物学において、有機体の各器官がその有機体の維持に寄与している過程を機能とよんでいるごとく、一つの要因・単位の活動がそれを含む高次の単位にとってどのような意味をもつかという見地から使用される場合である。この場合、機能が向けられる単位として選ばれてきたのは、従来、社会と個人であった。<sup>1)</sup>

機能は以上のようなレベルにおいて使われているが、それぞれのレベル (特に第二と第三のレベル) における機能の観点から首尾一貫して体系的に社会現象を分析していく立場が機能主義であるといえるであろう。したがって機能主義といっても決して一義的であるわけではない。しかしながら、それらのいずれの立場もつまるところ「機能」概念に立脚しているところから共通点を認めることもできる。

認識論的にいえば、機能とは「実体 (substance)」に対立する概念であり、したがって機能主義は、実体・本質、物自体 (thing in itself) は認識不可能であり、存在はただそのはたらき、作用、すなわち現象や属性においてのみ認識されうるとする不可知論の立場に立つ。

しかしながら、機能として顕現する社会現象の本質・実体は認識不可能なものであろうか。理論物理学者武谷は、社会科学へのアナロジーも可能であるといわれる氏の自然認識論、いわゆる「武谷三段階論」において、認識には現象論的認識、実体論的認識、本質論的認識 (本質論のなかにはつねに新しい現象論的要素が芽生え、次の発展を準備している) があり、一般的には認識はこの順をおうに従って深まり、確かなものとなり抽象度が増す、と述べている。<sup>2)</sup>

ある対象ないし存在の機能は、対象、存在の本質によって規定されて現象するはたらきにはかならないのである。このような意味において、機能主義でいわれる機能も、それが本質と無関係ではないこと、本質に規定されて現象していること、また武谷三段階論でいわれる現象論的認識の段階に相当するものであり、従って社会・文化現象の本質を究明するための第一段階であるという留保をつけて使用されるべきである。

2) みずからを機能主義の最初の提唱者であると呼号しているにもかかわらず、Malinowski において機能概念は決して一義的であるとはいえない。「集団が社会全体のうちで占める位置を算出する必要、つまりその機能を定義する必要」<sup>3)</sup>、「機能、すなわち活動の統合的效果」<sup>4)</sup>、「機能は、人々が協同し、製作物を使用し、財を消費する活動による要求の充足というより以外には定義されえない」<sup>5)</sup>、「機能とは、文化の体系全体の中で、制度の果している役割のことである」。<sup>6)</sup>

機能的文化観に対する彼の信念は学学生涯を通して少しもゆるぎをみせなかったといわれるが、みられるようにその強調点のおき方にはズレがみられる。しかしながら、「有益または効用、および関係という概念を通して機能概念にアプローチしなければならない」<sup>7)</sup>と述べているように、本書においては、前述の機能概念の第三のレベル、その中でも個人の欲求充足に対する文化の貢献を機能ととらえて、彼の文化論を展開していることは、後述のⅢ—1) 文化の定義のところで述べよ

う。……

次に、Malinowski の機能主義は、文化人類学における書かれざる歴史の復元の方法論、進化主義 (evolutionalism) , 伝搬主義 (diffusionism) の古典学派に対する明確な批判意識の上になつたものである。

「いうまでもなく、「遠くへだたつた地域相互間における文化の形態の一致類似という現象をば、多く人類普遍の内的発展法則にもとづく発展段階の同一性に帰し、したがってこれを各個独立の発生として説明する」<sup>8)</sup> のが進化主義に共通した考え方である。Morgan L.H. の有名な「古代社会」もこの方法論的立場によるもので、彼は人間性の斉一性の原理によって、人類はひとしく野蛮・未開・文明の三段階を経て進化するという社会進化論をうちたてた。

他方、伝搬主義は、文化の伝搬や借用、移動を重要視し、人間生活の主要な文化要素の空間的な類別的分布図—文化圏—を基礎とする。そして、同時に観察されうるこのような異質の文化圏は実は、「近代的文明以前の時代における文化の固執性・停滞性・保守性といったような一面の事実、ならびにこの事実の表現としての地球上における文化発展の不均衡性・跛行性」<sup>9)</sup> に由来するものであるから、文化圏を時間的な層位の関係—文化層—に還元して歴史を再構成しようとする考えである。

Malinowski はこのような進化主義、伝搬主義の考え方に対して、「両派の信奉家たちも……異なつた角度から文化の成長の問題にアプローチし、文化の解明に独自の貢献をしてきた」<sup>10)</sup> と評価している。しかしながらこの評価もそれぞれが自身の主張の適応範囲を正しく認識している限度においてである。例えば進化主義で「起源 (origin)」と並んで重要な概念である「段階 (stage)」にもとづく継起的発展段階図式についても、それを「きわめて一般的なものとするか、さもなくば一定の地域と一定の条件のもとにおいてのみ妥当させなければならない」<sup>11)</sup> また伝搬主義においてもその基盤は地図に記入された文化事象を比較することにあるのに、その比較法が誤っていたため、もともと容認できる考え方である伝搬主義の健全な発展が疎外された。

しかしながら、一定の留保をつけた上で評価され、Malinowski によって「一方にかたよらず、折衷でさえある見解をとる」<sup>12)</sup> 必要を説かせる両古典学派にも容認できない考え方が含まれている。それは、進化主義にあつては、「死重 (dead-weight)」, 「残存 (survival)」, 伝搬主義にあつては「借用した文化特性 (borrowed trait)」, 「文化特性複合」 (trait complex) などの概念に示される考え方である。

残存とは、その文化環境に適合することなく存続だけしている、無機能的な文化特色、または周囲の文化と調和しない機能を発揮している文化特色とされる。しかしながら、「残存が存続しうるのは、それが新しい意味、新しい機能を獲得したためであることは疑いない」<sup>13)</sup> 例えば、ニューヨークの通りにおける馬車の存在は、確かに交通機関の進んだ時代では効率的な交通機関としてみると時代遅れであるが、しかしながら「懐旧の情をやるため」という別の機能は果しうるものであり、しかもその機能は現在の諸条件と十分に調和しているのである。そしてこの残存の概念は、進化段

階を再構成するまやかしの方法として使われ、現地調査における観察を速成的に仕上げる簡便な方法となっている点で、害悪を及ぼしている。他方、文化特性、文化特性複合は、「文化を生命のない無機物とみる見解に害されており、文化を何世紀もの間冷蔵庫の中に保存しておけるもの、大洋大陸を超えて運搬できるもの、機械的に分解したり組立てたりできるものとして取り扱う」。<sup>14)</sup>このような考え方は、関連した一組の現象を、単なる勝手な想定にもとずいて独立させたり、実際に作用している文化諸要因によって決定された関係を探究するのではなく、本質的でなく重要でない構成に最大の関心を与えるという害悪をもたらす。

以上のように、両古典学派は「取り扱う文化的現実の完全で明確な分析に十分な注意を払ったかどうか」<sup>15)</sup>の点で、また「文化的事実の中で作用している関連した要因を明確に定義し、関連づけるという点での科学的活動にこれまで十分な注意が払われなかった」<sup>16)</sup>という点で、欠点をもつものであった。このような批判意識のうえにたって Malinowski は、「現地調査者に何を観察し、いかに記録すべきかに関する明確な見通しと十分な教示を与えることに主要な意味を与える」<sup>17)</sup>機能理論の立場、「機能主義が、文化の予備的分析として基礎的な妥当性をもち、人類学者に対し、文化確認の唯一の正当な規準を提供する」<sup>18)</sup>という明確な主張に至るのである。

#### 注

- 1) 作田啓一：文化の機能 講座社会学第三巻 社会と文化 東大出版会所収 pp. 34～35. 1958
- 2) 武谷三男：弁証法の諸問題 武谷三男著作集1 頸草書房 pp. 3～8, p. 33. 1968  
武谷：科学と技術 武谷三男著作集4 頸草書房 p. 253. 1969  
武谷：自然科学と社会科学 武谷三男著作集5 頸草書房 pp. 77～133. 1970  
坂田昌一：科学に新しい風を 新日本出版社 p. 181. 1966
- 3) B.Malinowski: A Scientific Theory of Culture and Other Essays, p. 45.
- 4) B.Malinowski: *ibid.*, p. 48.
- 5) B.Malinowski: *ibid.*, p. 39.
- 6) B.Malinowski: *ibid.*, p. 48.
- 7) B.Malinowski: *ibid.*, p. 155.
- 8) 石田英一郎：文化人類学ノート，新泉社，p. 85，昭和42.
- 9) 石田：同上，p. 76.
- 10) B.Malinowski: A Scientific Theory of Culture and Other Essays, p. 17.
- 11) B.Malinowski: *ibid.*, p. 16.
- 12) B.Malinowski: *ibid.*, p. 24.
- 13) B.Malinowski: *ibid.*, p. 29.
- 14) B.Malinowski: *ibid.*, p. 32.
- 15) B.Malinowski: *ibid.*, p. 26.
- 16) B.Malinowski: *ibid.*, p. 21.
- 17) B.Malinowski: *ibid.*, p. 175.
- 18) B.Malinowski: *ibid.*, p. 176.

## III

1) Malinowski は文化をどのようなものとして考えたのであろうか。「文化はあきらかに、道具および消費財、種々の社会集団の憲章、人間の観念および技術、信念、慣習からなる統合的全体である」、<sup>1)</sup>「人間の直面する具体的で特殊的な問題の処理を可能にする、一部物的、一部人的、一部精神的な巨大な装置」、<sup>2)</sup>「文化は、ある程度自律的な、ある程度調整された諸制度からなる統合的全体である」、<sup>3)</sup>「文化は相互に依存した種々の要素からなる統合的全体である」。<sup>4)</sup> みられるように、文化とは一つの有機体にも似て、その中に関係のない要素は一つとして含んでいず、相互に依存しあう構成要素からなる全体である<sup>5)</sup>。有機体における一つの器官の異常が他の器官、ひいては有機体そのものに影響を与えるように、文化においても、一つの構成要素の変化は他の要素、および文化全体に対して変化をもたらし、またそれらから反作用をうける。つまり、文化は構成要素の単なる算術的総和ではなく、化学元素が融合してまったく違った性質をもつ化合物になるのに似て、一つの有機体のような統合性を示すのである。

このような文化における統合性、全体性の主張は、伝搬主義における文化特性といった概念に示されるように、部分を全体的関連から抜き出し、孤立させた状態で扱うやり方に対する批判のうえにたった Malinowski の機能主義の立場から必然的に導かれる結論であらう。構成要素、部分はそれが何らかの機能を果している限りにおいて、すなわち他の要素および全体との間に有機的な関係を有している限りにおいて存在を許されているのであり、無機能的な存在は、一時たりとも許されない。

さて、統合的全体性をもつとされる文化の範囲はどこに求められるのであろうか。世界文化、日本文化、地方文化といわれるごとく、日常的な使い方においては、文化は種々のレベルにおいて用いられるが、Malinowski においても、言語の共同範囲であることを示唆しているとはいえ、明確であるといえない。もちろん、彼が現地調査の対象とした未開民族は他とそれほどの交渉なしに生活しているのであるからその範囲に限定できるであらうけれども、生活、生産の社会化の進んだ段階ではその範囲はもっと広がらざるをえない。要するに、ほとんどの生活関心がみたまされる生活の範囲、上述の文化の定義との関係でいえば、人が生物の一種であるという事実、人間の友人であるとともに危険な敵でもある環境の中に生きているという事実、から生ずる諸問題の処理をなしうる生活の範囲ということで、固定的に考えることのできないものであろう。<sup>6)</sup> したがって文化を分析するには、いずれの文化にもみられる組織行動の具体的な独立単位、すなわち文化分析の正当な独立単位たる制度の概念を使用しなければならない。<sup>7)</sup>

次に、統合的全体性をなす文化の構成要素にはいかなるものがあるのであろうか。さきほどの定義にみられる、「道具および消費財、種々の社会集団の憲章、人間の観念および技術、信念、慣習」、「一部物的、一部人的、一部精神的」という表現は、構成要素の質的類別を示していると考えられる。つまり、文化の構成要素には、道具、消費財等の物的存在、技術、慣習などの人的行

動、憲章、觀念、信念などの精神的なものの三種があるということである。<sup>8)</sup>では、それらの質的類別要素の相互関係はどのようなあり方をしているのか。Malinowski は文化の究極の決定者を憲章などの精神的なもの、あるいは「文化の全体的性格」に求める。文化の全体的性格を規定するのは主要な第一要素となるであろうから、結局は精神的なものに収斂させることができよう。「物的対象は文化の中でたいへん特殊な役割を演ずる」のであるが、「ある製作物を文化要素のモデルとすることはきわめて危険である」<sup>9)</sup>これは明らかに觀念論的立場である。「生産や所有の体系が、人間生活の全表現領域を疑いなく決定している一方で、知識や倫理の体系によってそれら自身は決定される」<sup>10)</sup>のである。

次に Malinowski の文化概念を特徴づけるのはその反歴史主義的立場である。「その果によりて彼らを知るべし」という基本的立場にたつ機能主義は、果をつける一すなわち機能が顕現する一までは、また果をつけなければ永遠に、その存在を認めないし、注意を向けることもない。「残存」概念を批判したのも、機能主義の必然的結果たるこの現在主義の立場にもとづく。この反歴史主義は文化を手段視する Malinowski の考え方と表裏をなすものであるから、次に彼の手段的文化概念をすこし詳しく検討してみよう。

「文化は、人間の手工品として、人間がその目的を達成する媒体 (medium)、すなわち人間に生きること、一定水準の安全、安楽、繁栄を確立することを可能にすることを可能にする媒体、人間に力を与え、その動物の有機体的資質では不可能な財と価値の創造を可能にする媒体として存在するのであり、従って文化は目的に対する手段として、すなわち道具的、機能的に理解されなければならない」<sup>11)</sup>文化とは、有機体的資質では達成されえない生活水準を人間が維持し、発展させるために遂行しなければならない課題を遂行するうえでの媒体に他ならない。「文化は本質的に、人間がその要求を満たす過程において、環境の中で彼が直面する具体的で特殊な諸問題のうまい処理を可能にする道具的装置である」、「文化とは、各部分が目的に対する手段として存在するところの、事物、活動、態度からなる体系である」<sup>12)</sup>目的に対する手段としての文化の位置づけ、この場合の目的が人間の要求、その基本的要求に他ならないことは後に詳述されるであろう。このような手段的文化観は機能主義的文化観の最大の特徴でもあり、Malinowski の文化概念の最も基本的な特徴であるということが出来る。

2) Malinowski が人間の研究にとって最も根源的な前提であるとするのは、「人間は一つの動物種である」<sup>13)</sup>ということである。したがって文化が人間にかかわる事象である限り、「文化理論は、すべての人間が一つの動物種に属するという事実のうえにその基礎をおかなければならない」<sup>14)</sup>万物の霊長とされる人間も生物の一種であることを免れることはできないという厳然たる事実、文化の理論もこの事実を踏まえてはじめて科学性を有することになる。しからば文化理論の出発点となる一生物種としての人間は、いかなる属性においてその本質をおさえることができるのか。Malinowski はそれを、個々の有機体の存続にとって不可欠であるところの衝動 (impulse)



と行為によるその充足に求める。彼によると、人間の本性、すなわち人間性 (human nature) は、「人間がどこに住み、どんな型の文明を実践していようとも、彼らは誰でも食べなければならないし、呼吸、睡眠、出産、体内からの老廃物の除去をしなければならないという事実によって定義されうる」<sup>15)</sup>。

次に、人間性の内容を構成し、Malinowski によって文化の生物学的基礎とされた生理的衝動にはいかなるものが存在するであろうか。彼は具体的に11種の衝動を列挙している。そしてこの有機体の生理的状态によって主として決定される衝動に対して、それを充足するための生理的パフォーマンス、生理的パフォーマンスの終局の結果としての最初の衝動の満足した状態、を構造化し、それを生命活動系列 (vital sequence) と呼んでいる (表1)<sup>16)</sup>。

表1 すべての文化に組み入れられている恒久的生命活動系列

(A) 衝 動→	(B) 行 為→	(C) 満 足
呼吸衝動、空気を 求めているあえぎ	酸 素 吸 入	細胞組織内 $\text{CO}_2$ の除去
飢 え	食 物 摂 取	満 腹
渴 き	液 体 の 吸 収	渴 き と ま る
性 欲	交 接	腫 脹 消 滅
疲 労	休 息	筋肉および神経のエネルギーの回復
運 動 衝 動	活 動	疲労という満足
睡 気	睡 眠	エネルギーを回復しての目覚め
膀胱 圧 迫	放 尿	緊 張 の 除 去
結 腸 圧 迫	排 便	腹 腔 の 弛 緩
恐 怖	危険からの逃避	安 心
苦 痛	効果的な行為による回避	通常状態への回帰

この生命活動系列はすべて生理学と解剖学に関係づけて定義することのできる、生物学的に決定されたものである。有機体が生存するためにはそのいずれをも欠くことはできない。その中でも性欲に関する系列についていえば、それを満たす行為としての交接が効果的であれば、新しい生命を出現させるという点で、社会の存続の基礎的条件をなすものである。

ではそれらの系列相互の関係はどのように考えたらよいのであろうか。これまでに、マルクス主義は飢えの系列をとりだし、人間性全体の支配的な原動力だとし、Freud, S はそれを性欲の系列に求めて、体系的な理論を構築したが、Malinowski はそのような決定論的なとらえ方はしない。人間有機体は構造的生理的に分化しており、いずれの生命活動系列もある程度の自律性を有しているから、相互的にはおおむね無関係であり、しかも、「高度に複雑化し分化した文化活動の全領域は、それが未開の段階にあらうと高度に発達した段階にあらうと、すべてここにあげられた生命活動系列に多少とも直接的に関連していることははっきりしている」<sup>17)</sup>のだから。

この生命活動系列の概念は、生物学的決定作用が、ある一定不変の連続的な活動を人々におしつ

けることを意味するから、表に示した生命活動系列はどの種の文明にも必ず組み入れられているものである。さらにいえることは、三つの局面はいかなる文明においても生起し、それぞれの局面の生理学的な最小の性質が永久不変であり、三者の連結も変わることはない、ということである。この過程の生物学的、解剖学的側面は、文化の科学の本来の問題ではない。しかしながら文化を研究する者にとっての出発点をなすものである。

3) 以上述べてきた生命活動系列は、あくまでも文化理論の基礎としての人間の有機的次元に限定されてはじめていえることである。したがって、生命活動系列を人間の営為という位相に移しかえてみると、それには多くの条件が加わってくる。

例えば、衝動そのものからして、それは伝統によって作り直されるものであり、文化の状態において、単なる生理的衝動というものは存在しない。飢え、食欲をとってみると、その衝動の対象、すなわちおいしいもの、食べてよいものは文化によって決定されており、食欲の起こる時間からして文化の影響を強く受けている。また、性欲にしても、その衝動を引き起こす対象の属性は文化の影響を強く受けており、近親間の性交禁止 (incest taboo) などによって制約されている。要するに、「最も単純な生理学的パフォーマンスを生ずる衝動でさえも、それが生理学的必要によって決定されているために、結局は免れることのできないものであると同時に、高度に可塑的であって伝統によって決定されているという事実を無視することは根拠がないであろう」<sup>18)</sup> また、生命活動系列の核心たる行為の局面についても文化によって統制され、変容されることは明らかである。食物摂取にしてもそれは集団的に生産され、調理されたものを、一定の食事作法や若干の共食の規則にしたがってなされるであろうし、交配も、相手の感情や反応を無視してどこでどんな風に遂行してもよいような行為ではない。また行為はすべて特別の道具立て、物的装置を必要とする。生命活動系列の第三の局面である満足についても同じことがいえる。原住民がトーテム動物を食べ、正教ユダヤが豚肉を腹いっぱい食べ、バラモンが牝牛の肉を胃の中につめこんだとしても、彼らは決して満腹感を味わうことはできない。逆に彼らは、嘔吐、消化障害、禁を破った場合における罰であると信じられている病気の徴候を示すであろう。同じく、近親間の性的行為や不貞な交配も、変質のとみなされる者を除いては満足をもたらさないであろう。

ここにきて、さきの生命活動系列に示されている純粋に生理学的な考察は、必要な出発点ではあるが、人間が文化的条件のもとでその有機的衝動を満たす仕方を考察するときには不十分であること、したがって、個人や集団の価値・信念・規範や人為的環境に関係づけて生命活動系列が考察されなければならないことが明白になった。文化的行動を研究する時には、生物学を忘れてはならないが、生物的決定論だけで満足しているわけにはいかないのである。すなわち、衝動、行為、満足の三局面からなる生命活動系列が、文化的道具立ての内部でどのように生起するかを説明する必要、つまり生命活動系列の文化的再定義の必要がでてくる。

Malinowski は、伝統によって変容された衝動を要求 (need) と呼び、このことばを、有機体個

々に関して用いないで、むしろ社会とその文化の全体について用いて、集団と有機体の存続に必要なにして十分な諸条件の体系という意味でとらえている。そして、文化的に再定義された生命活動系列を基本的要求と文化的反応として表2のように示している。<sup>19)</sup>

表2 基本的要求と文化的反応

基本的要求	文化的反応
1. 新陳代謝	1. 食糧供給
2. 生殖	2. 親族
3. 身体の保護	3. 保護装備
4. 安全	4. 防衛
5. 運動	5. 活動
6. 成長	6. 訓練
7. 健康	7. 衛生

以下、さきの生命活動系列における衝動と対照させながら基本的要求について摘記してみよう。

新陳代謝の項目は、あらゆる有機体が一般に、物質の供給を保証する一定の諸条件、消化過程の遂行を可能にする諸条件、および排泄過程の衛生的処置を必要とするということを意味しており、呼吸衝動、飢え、渇き、膀胱圧迫、結腸圧迫の衝動に対応する。

生殖は、社会の人口を補充するには生殖作用が十分な数的規模で行なわれる必要があることを示しており、衝動でいえば性欲に対応する。

身体の保護は、気温、湿度が適当な範囲内にあり、身体に触れる有毒物がなくて、血液の循環・消化・内分泌・新陳代謝といった生理的過程が純粋に自然科学的な意味で継続することを示している。衝動でいえば、呼吸、飢え、渇きなどに関係しているといえるだろう。

安全では、文化およびそれをなす集団の存続のためには、機械的事故や動物または人間の攻撃による身体の傷害を防止する必要があることを意味している。恐怖、苦痛の衝動が文化的に再定義された要求である。

運動の項目は、活動が文化にとっても不可欠であるとともに、有機体にとっても必要であることを意味しており、一群の人々が生活し協力するための一般的条件となった運動衝動である。

成長の項目は、成長・成熟・老衰の事実が文化に対し、一般的な、しかし非常に明確な条件を課していることを明らかにしている。これに対応する衝動は、たしかに種々の衝動や要求と関連した生物学的事実であり、文化を決定する生物学的要因の一つとしてあげることはできるが、一覧表にのせることは適当でなかった。

健康は、有機体を生存に不可欠なエネルギーの達成に適した正常な状態に維持することである、と定義づけられるが、それは他のすべての要求に関係している。「個人と集団の存続は、文化的課題の遂行に必要な、また人口の漸減の防止となる最低人口の維持のために必要な、最小限の健康と

生命力 (vital energy) の維持を必要とする」<sup>20)</sup>から。

このように、生物学的に決定され、人間性による決定作用を受ける衝動と、それが文化的に再定義された基本的要求の間には間接的な対応しか見い出せない。それは、衝動はあくまでも有機体の個体的レベルで考えられたものであるのに対し、基本的要求は、むしろ社会とその文化の全体について考えられたものであるという相違によるものであろう。ではこの他には基本的要求は考えられないのであろうか。またそれらのうちどれが基本的であり、どれが随伴的であるのか、要求相互の関係はいかにあるのか、付随的な文化的要求はいかにして起こるのか、という問題にいかにかえるのか。Malinowski はこの問題の評定は、「すべての文化は生物学的な要求の体系を充足しなければならない」、「製作品とシンボルを用いてなされるすべての文化的達成は、人体組織の強化を伴い、肉体的要求の充足に直接間接に関係している<sup>21)</sup>」という二つの公理のうえにたってはじめて可能となるとしており、7つの基本的要求はその結論であるということになる。<sup>22)</sup>

既に文化の定義をみたところで明らかなように、文化の機能は基本的に人間のもつ有機的・基本的要求の充足であり、文化がいくら複雑さを増そうと、どんな種類の文化であろうと、人間の基本的・有機的要求を想定することはいつになっても文化現象の研究の出発点でなければならない。

「人間や種族のもつ有機的・基本的要求の充足は、すべての文化に課せられた最小限の条件である」<sup>23)</sup>からである。

文化的反応の欄は、基本的・有機的要求が文化的に充足される様式を示したものと考えてよからう。以下、それぞれの文化的反応について摘記していくことにする。

食糧供給。調理、食事の場所、貯蔵庫、生産用具などの物的装置が必要であり、それらは更新されなければならない。また食事作法をはじめとして全過程が規律によって統制されており、それらの規範は強制や権威によってささえられており、新しい世代に対する訓練によってそれらは受け継がれている。

親族。ある文化では、求愛は娘の家庭において特別のとりきめによって行なわれ、婚姻の様式もその大部分が法的に、ある伝統によって規定されている。最も私的な事柄に属するこの過程も公的な関心事となっており、したがってそれらの過程についての諸慣習が破られた場合には社会的な非難をあびなければならない。子どもができ親子関係ができあがるとそこには教育の要素が強く入りこむことは明らかである。

保護装備。雨でずぶぬれになった時、人はゆきあたりばったり避難所を探すようなことはしない。迷うことなくそのために作られた雨具を使用するか、身体を暖めるために手皮などからできた衣服を着るであろう。このような速決的な処置は訓練によって習慣化されており、違反を罰するために何らかの権力も存在している。

防衛。津波、火山の爆発等の自然の災厄から身を守るために、われわれはそれらの被害を避けるような場所に、それらに耐えうるように設計された家屋を建てるであろうし、他の人間や動物の襲撃から身を守るために武具を開発し用意しなければならない。また標準化されたそれらの作成・

使用技術は、訓練によって次の世代に伝えられなければならない。直接的な身体傷害をうけないために、それは強い強制を伴う。

活動。これは人間性が文明に課したきわめて一般的な至上命令である。というのは、もし筋肉が動かず、神経組織が明確に方向づけられることができないとすれば、人間は何もすることができず、したがってすべての基本的要求の充足が不可能になってくるからである。この意味での神経・筋肉活動はすべて道具的であり、他のすべての要求の充足に向けられる。他の領域の活動は、例えばスポーツ、ゲーム、ダンス、フェスティバルなどの、規制され確立された筋肉・神経活動それ自体が目的となった、特別に統制された活動である。それは教育の内容となり、経済的技能の予習としても利用される。

訓練。文化とパーソナリティに関する問題がこの項目にはいる。一切の知識の基礎、慣習、倫理の尊重は家族内で教えられ、遊び友達の間で礼儀作法や社交性を身につけ、さらに成長すると特別の職業に対する見習修業が課せられる。

衛生。肉体露出に関する規則、危険や事故の回避、家庭療法、未開文化における魔術や妖術に対する信仰が有機体の健康のために存在する。

以上の基本的要求に対する文化的反応は、運動に対する文化的反応としての活動のところでみたように、決して単一の要求の充足に限定されたものではない。文化的反応相互の間には、次に述べる道具的至上命令としての多くの共通した要因が見い出されるのであり、したがって「活動の組織的な、確立された体系についての機能を完全に定義するためには、それらの本質的な性質を決定すると同時に、それに他の副次的な機能を関係づけることが常に必要である」。<sup>24)</sup> なお、文化的反応は、「文化分析の正当な独立単位」たる制度において具体的に把握することができるが、制度については後程詳しくみることにする。

4) 基本的要求に対する文化的反応の内容についてみたところから看取することができるように、文化的反応のうちには共通の幾つかの種類の活動が含まれている。Malinowski はそれを、経済、法、教育、政治に関する活動であるとしている。つまり、いずれの基本的要求を充足する時にも「人間は経済的に共同しなければならないし、秩序を確立し、維持しなければならないし、成長しつつある新入りの成員有機体をすべて教育しなければならないし、またこれらのすべての活動においては強制の手段をなんらかの仕方を使わなければならない」。<sup>25)</sup> Malinowski はこれらの活動を文化の道具的至上命令 (instrumental imperative of culture) と呼び、それに対する反応を併せて表3のように示している。<sup>26)</sup>

人間をその出生時においてみると、およそ一年の生理的早産であるといわれるほどに、有機体的資質において人間は他の動物にくらべて劣っている。他の動物にみられるような身にそなわった天賦の武器は何一つもっておらず、素手では何事をもなしえない存在である。しかしながら、それらの天賦の武器にかわる道具を考案し発達させる。ある問題を解決するために考案された方法、手段

表3 道具的至上命令と反応

至 上 命 令	反 応
1. 道具, 消費財からなる文化的装置は生産され, 使用され, 維持されなければならない。新しい生産によって更新されなければならない。	経 済
2. 人間の行動は, その技術的・慣習的・法的・道徳の規定について, 体系づけられていなければならない。賞罰によって規制されなければならない。	社会統制
3. すべての制度を維持するための人的素材は, 更新・形成・訓練されなければならない。部族の伝統についての完全な知識を与えられなければならない。	教 育
4. 各制度内部の権威を規定し, それに権力を付与し, その命令の実行を強制する手段を供与しなければならない。	政治組織

は, それが制度化されると, 動物にみられる天賦の武器をはるかにしのぐ力を発揮する。そして一度確立された組織的行動体系は, 次から起こる類似の問題の解決にあたっては, 既定的に水路づけを行ない, 人間に問題解決の筋道を強制するようになるであろう。この段階になると既定の筋道以外での問題の解決は考えられなくなる。

今上述の問題の解決を基本的要求の充足と読みかえるなら, 経済, 法, 教育, 政治にかかわる活動は, 文化の状態での基本的要求の充足のためには絶対に遂行されなければならない, ということになる。文化の状態にあっては, これらの道具的至上命令に対する反応なくしては, 基本的要求の充足が不可能になるのであるから, 基本的要求の充足にあたって, 「文化の規則への服従は, 生物学的決定主義への服従と同様に決定的である」<sup>27)</sup>といえよう。要するに, いかなる基本的・生物的要求も, 人間に対してはそれは文化の道具的至上命令というかたちで対置され, このような道具的至上命令を満たすことで間接的に基本的要求の充足をもたらすのである。このように常に派生的要求が基本的要求に手段として関係しているという事実が, 派生的要求をして基本的要求に劣らず厳粛なものにしている。

経済的行動については述べるまでもなからう。生活手段を生産するのはこの行動による。

社会統制の項目によって, あらゆる社会においてその成員に権利・義務を知らしめ実行させ, または逸脱・違反に対しては制裁を示す規範の存在が明らかにされる。

また自発的社会化を結果する教育によらなければ社会統制は不可能であり, 家族集団をはじめ組織的な制度においても特別の見習修業を施すことが知られている。

また, 社会規範の実効を保証するものは, 逸脱の際に発動する直接的な力の行使である。その存在についての認識それだけで, 人々を逸脱的行動から遠ざける。

また以上の行動においてはいずれもシンボル行動が不可欠であることも明らかである。このように, 基本的要求は迂路を通して間接的に充足されるのであるが, このことを Malino-

wski は別のやり方でも説明している。

図1は、生命活動系列に対応する文化過程を図で示したものである。<sup>28)</sup>

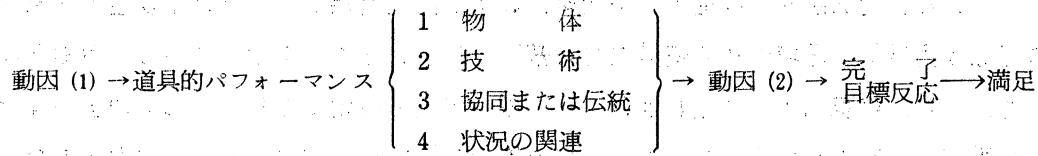


図1 道具的系列の図式

動機 (motive), 動因 (drive) は, 所与の文化において 現実に作用している衝動を意味するものとして用いられている。人間のすべての文化的行為においては, 最初の動因は直接目標に向かわず, 目標達成を可能にする手段に向かうという事実がこれによって表現されている。そして, 手段の介入によって延長された生命活動系列は, 一たん確立されると強制的なものになるから, 「有機体は結局, 生理学的快感を直接もたらしてくれる対象に対するのと同じか, または少なくとも類似の食欲力をもって道具的要素に反応する」<sup>29)</sup> ようになるのである。この道具的パフォーマンスが, 道具的至上命令に対する反応に対応することはあきらかであろう。そして, 道具的至上命令に対する反応も, 道具的パフォーマンスも分析的には制度の概念においておさえることができる。

5) 既に触れてきたように, Malinowski の文化論において, 制度の概念は重要な位置を与えられている。「文化は, ある程度自律的な, ある程度調整された諸制度からなる統合的全体である」<sup>30)</sup>。一つの文化を研究し, その性質を解明しようとするれば, われわれはその本質的な構成要素である制度を, 文化分析の正当な独立単位として研究しなければならない。進化, 伝搬の過程はまず制度の変化という形で生起するのであるから, これまでいわれてきた「文化特性」などの概念も制度の中に位置づけられなければならない。

Malinowski の制度概念は, 時に目的ある行為の組織的体系であるといわれ, 時に組織・社会集団の意味で用いられているように, 次元を異にした種々のレベルで用いられている。しかしながら, 行為を担うのは人であり, 行為の体系を担うのは複数の人々, つまり集団であるから, そこにはそれほどの区別は必要でなかったのかもしれない。

それはともかくとして, Malinowski の制度概念についてその構造をみてみよう。

彼は制度の構造を図2のごとく考えている。<sup>31)</sup>

憲章とは, 人々がそれを実現するために組織を作ったり, 既存の組織に加入したりするところの承認された集団の目的, 価値体系のことであり, それは活動の統合的結果である機能とは本質的に異なる。人的組織とは, 権威, 機能の区分, 権利・義

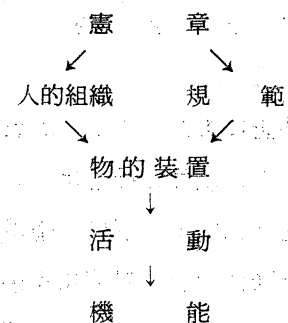


図2 制度の構造

務の配分についての明確な原理にもとづいて組織された一群の人々のこと、規範とは、成員によって承認されているかあるいは成員に課せられているところの獲得された技術的熟練・習慣・法規範・道徳律のことである。物的装置とは道具・消費財、および共同行為からうまれる収益の一部であり、すべての組織は例外なく環境の物的道具立てを基礎としていることを示している。活動とは、成員の能力、力、誠実、善意によって左右されるところの現実の行動であり、それは理想的な行動の仕方を述べた規範とは明らかに異なる。機能は組織的活動の統合的結果であり、憲章と異なることはすでに述べた。

Malinowski の示すこの制度の構造は、実はすべての組織、社会集団に共通してみられるものであり、文化相互の比較に際して絶対に必要になってくる明確な共通尺度の役目を果すことになる。「制度が文化分析の真の独立単位である」といわれるゆえんである。

では制度にはどのような性質のものがみられるのだろうか。Malinowski はどの文化にも共通な制度の類型、分類リストを作ることとは可能であるとして、制度を作るにいたらしめる一般的統合原理とそれに対応する制度を表4のごとく示している。<sup>32)</sup>

表4 普遍的制度類型のリスト

統合原理	制度類型
1. 生殖	家族、求愛組織、婚姻についての法的規定と組織、拡大家族集団、親族集団、氏族、氏族の連合体
2. 地域的	諸地域集団、地区、地方、部族
3. 生理学的	未開人の性別トーテム集団、生理的、解剖的な性的相違にもとづく組織、機能と活動の性的分化に由来する組織、年令集団および年令階層、てんかんの組織、病人のための施設
4. 随意結合	秘密結社、クラブ、レクリエーション仲間
5. 職業的	呪術師、シャーマン、ギルド、企業、専門職業人の結社、各種の学校、軍隊、宗派
6. 身分と地位	貴族・僧侶・市民・農民・農奴・奴隷の身分、カスト制度、種族的な階層
7. 包括的	下位文化集団、政治単位

現実調査にあたっては、これらのリストは有用な手引となるであろう。

ところで、制度の概念は、これまでに述べてきた文化の全体性、文化の構造、文化的反応、道具的至上命令に対する反応、道具的パフォーマンスに深く関係しているし、むしろこれらの本質は収斂された形において制度に反映されているといえることができるだろう。

文化は、その有機的構成要素たる制度からなる統合的全体をなすものであるが、その制度自体ある程度の自律性を備えた統合的実在である。図2に示された制度の構造に含められた要素は、それら相互が密接に関連し合っではじめて制度としての機能が発揮されるのである。文化は、物的存



在、人的行動、精神的なものにその要素を質的に類別することができるが、制度を構成する要素も、憲章——精神的、人的組織・規範・活動・機能——動的、物的装置——物的、というようにして類別される。基本的要求に対する文化的反応も一つ残らず、制度化されてはじめて遂行されることは明らかである。道具的至上命令に対する反応としての経済、法、教育、政治に関する行動も、制度の維持、存続のためにそのいずれも必要不可欠であると同時に、各々の反応も制度を介して遂行されている。道具的パフォーマンスとの関係でいえば、憲章——動因、物的装置——状況の関連・物体、規範——技術・協同または伝統、人的組織——協同または伝統、活動——全体としての道具系列、機能——動因と満足をつなぐもの、というように対応させることができるであろう。

要するに、われわれは文化のいかなる側面を研究するにしても、つまるところ制度の存在につきあたるということである。

## 注

- 1) B.Malinowski: A Scientific Theory of Culture and Other Essays, p.36.
- 2) B.Malinowski: ibid., p.36.
- 3) B.Malinowski: ibid., p.40.
- 4) B.Malinowski: ibid., p.150.
- 5) 文化の統合的全体性の主張は、今日の文化人類学では正当に属する。例えば「恥の文化」で有名な R. Benedict は、「右の眼をフィジ島から、左の眼をヨーロッパから、片足をフェゴ島から、他の片足をタヒチ島から、指やかかとをまた別の地方からとってきて、一種の機械的なフランケンシュタイン的怪物を作りあげている」従来の民族学的比較研究を批判し、「食べたり、生殖したり、戦ったり、神をまつたりするためにつくられたさまざまな行動のすべてを矛盾のない統一体に形成する無意識的な選択基準」としての「文化の型」の概念を提唱している。R.Benedict: 文化の型 米山俊直訳 社会思想社 p.86 p.85 1973
- 6) 石田は、マルクス主義でいわれる経済的社会構成体を文化の統合的全体性を示す単位として取り上げている。そしてそれを、物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係をもって文化全体の基礎構造とみ、文化の発展の究極的な動因を生産力に求めるところの、文化の運動を形而上学的な精神や、生物学的ないし心理学的要因からではなく、いわば文化の次元において説明しようとした最初の試みの一つである、と評価している。石田英一郎: 文化人類学ノート 新泉社 昭和42年。
- 7) 制度については後述の III-5) において詳述することにする。
- 8) R.Linton も文化は物質的なもの、動的なもの、心理的なものの三つの構成部分からなるといっており、P.A.Sorokin も文化構造を物質的文化、行動的文化、観念的文化のレベルに分けており、類似した考え方を示している。R.Linton: 文化人類学入門 清水・犬養訳 pp.56~57 創元新社 昭和27年。  
P.A.Sorokin については、高橋徹: イデオロギー、講座社会学 3 東大出版会 p.168, 1958参照
- 9) B.Malinowski: A Scientific Theory of Culture and Other Essays, p.20.
- 10) B.Malinowski: ibid., p.49.
- 11) B.Malinowski: ibid., pp. 67~68.
- 12) B.Malinowski: ibid., p.150.
- 13) B.Malinowski: ibid., p.36.
- 14) B.Malinowski: ibid., p.75.
- 15) B.Malinowski: ibid., p.75.

- 16) B.Malinowski : *ibid.*, p.77.
- 17) B.Malinowski : *ibid.*, p.81.
- 18) B.Malinowski : *ibid.*, p.87.
- 19) B.Malinowski : *ibid.*, p.91.
- 20) B.Malinowski : *ibid.*, p.75.
- 21) B.Malinowski : *ibid.*, p.171.
- 22) 基本的・有機体的要求リストの客観的確認には、困難がつきまとう。Malinowski は別のところで、「要求の充足を機能と定義する時に、機能を満たす必要のために、充足さるべき要求が導入されたのではないかと疑われやすい」と述べている。B.Malinowski : *ibid.*, p.169.
- 23) B.Malinowski : p.37. 文化の機能を人間の有機体的要求の充足におく Malinowski の文化論は、同時代のイギリスの文化人類学者、Radcliffe Brownが同じ機能主義の立場にありながら、その機能対象を社会的凝集と継続性に対する遠回しの成果ととらえた点に対して明確な相違を示す。E.Durkheim の社会学主義的機能観を完全に受け継いだ Radcliffe Brown に対して、Malinowski が生物学主義、心理学主義に走ったといわれるゆえんである。彼は、E.Durkheim に対して、「人間行動を生物学的基礎に何らかの形で関係づけることを完全に拒否した」と批判している。B.Malinowski : *ibid.*, p.19.
- 24) B.Malinowski : *ibid.*, p.114.
- 25) B.Malinowski : *ibid.*, p.120.
- 26) B.Malinowski : *ibid.*, p.125.
- 27) B.Malinowski : *ibid.*, p.121.
- 28) B.Malinowski : *ibid.*, p.137.
- 29) B.Malinowski : *ibid.*, p.138.
- 30) B.Malinowski : *ibid.*, p.150.
- 31) B.Malinowski : *ibid.*, p.53.
- 32) B.Malinowski : *ibid.*, pp.62~65.

#### IV

これまで、Malinowski の文化論を検討してきた。その中で彼は当然にもスポーツに言及しているが、しかし彼の場合文化それ自体についての体系的論述を目的としているのであるから、スポーツについてみる限り十分であるとはいえない。本章では斯学における研究成果をおりこみながら、スポーツを軸にして Malinowski の文化論を概略的に跡づけ、むすびにかえたい。

まず、われわれはスポーツを文化としてみるとき、それが人間の営為に他ならないことを確認する必要がある。では、ある歴史的、社会的必然性をもってあらわれたスポーツ、そのスポーツを現象させる人間とは何か。人間性とは、何よりもまず、生きなければならないし死ななければならないということ、つまり人間も動物の一種であるという事実に求められなければならない。したがってスポーツ文化を考えると、動物としての人間、人間性をみることはその出発点をなす。そして、動物としての人間を規定するのは、衝動と、行為によるその満足である。

衝動は具体的には11の種類からなるが、その中に、運動衝動 (restlessness) が含まれる。動物とは植物と異なって空間的にその位置を移動させるところに特色があるのであるから、じっと体を静止させておくことは動物種としての人間にとってこのうえなく耐え難いことであり、不可能事であ

る。そういう意味で、活動によって運動衝動を満たし、疲労という満足を得ることは、人間の有機的次元を全うするにあたって不可欠なことからである。

ただ、11種の衝動系列が相互に無関係であるという見解には疑問がある。例えばもう一つの衝動である「疲労」が極に達していた場合は決して運動衝動は起こりえないであろうし、「睡気」、「飢え」、「渴き」などの衝動を活性化させるであろう。であるから相互に無関係であるとはいえず、われわれに関係の深い運動衝動をとってみても、それを中心としたすべての衝動の連鎖を考えることができるであろう。図3は、試みに系列相互の関連を、運動衝動を中心にして図示したものである。

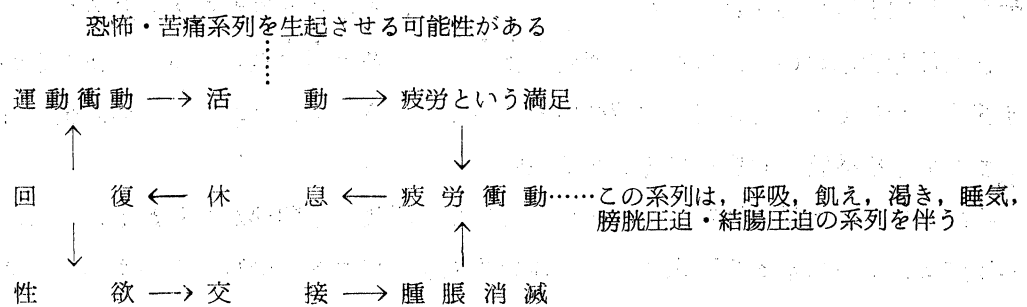


図3 生命活動系列の関連図

このように、運動衝動は人間の有機的次元を規定する本能ともいえるものであり、スポーツを考えると時の出発点をなすが、しかし社会をなして生活する人間の営為としてスポーツをとらえる場合それでは十分でない。人間は一動物種であると同時に単なる動物種ではないからである。したがって衝動を文化的に定義しなおしてみる必要がでてくるが、それは、運動 (movement) という基本的要求と活動という文化的反応の形でとらえられる。

運動衝動を満足させる行為としての活動は、決してパターン化された定型的活動でなく抽象的な活動一般を意味するのであるが、基本的要求に対する文化的反応としての活動には、大きく二つの領域が存在する。手段としての活動と目的としての活動である。

基本的要求を満たすいずれの文化的反応をとってみても、反応を遂行するにあたっては必ず身体の動きを伴うであろう。自分の意志で精神・筋肉の動きをコントロールできないなら、いずれの文化的反応も不可能にならざるをえない。かつて篠原は体育の目標を「身体の意志的形成」<sup>1)</sup>にあるとしたが、これなどは手段としての活動に焦点をあてた体育論といえるだろう。また、今日の学校体育の教材は、大きく体操・スポーツ・ダンスに分類されるが、そのうちで体操はもっぱら手段的活動として位置づけられている。

Malinowski はスポーツ (ダンスも含めて) を、もう一つの、目的としての活動の領域に含めて考えている。スポーツとそれを構成する運動技術は、人々が筋肉、神経のエネルギーを消費するために用意された水路づけ (channelizing) の錯綜した構成物であり、活動過程において喜びが感じとられるように設計されている。今日の学校体育における教材としてスポーツも基本的にこの方向

で考えられている。スポーツ目的論を展開するいわゆる「運動文化論」者も、体育は「運動文化の追求、獲得と、その創造・発展を自己目的とする」ことによって、人間の全面的な発達に重要な寄与をなす、と主張している<sup>2)</sup>が、これもスポーツのとらえ方において Malinowski と共通した面をもっているといえよう。C.Ulrich も、Hence Metheny の “as we learn to move, so we move to learn” という言及に示唆をうけ、人間は “move to learn” のためには、“move” それ自体を学習しなければならないが、体育はこのサイクルの中の “learning to move” の側面に対して特別の責任を負うと述べている。<sup>3)</sup>

しかしながら、目的と手段はある程度相対的であるといえるし、Malinowski の手段としての活動も、目的としての活動への習熟によっておおいにその可能性が高められるだろう。

また体育論において、体育は、運動による教育と運動への教育の統一であるとか、運動教材は、発達への刺激であると同時に学習の内容であるという形で、手段としての活動と目的としての活動がすべて学校体育の対象になるとする主張もみられる。

手段としての活動の性質、それと目的としての活動との関連からわかるように、活動という文化的反応は、第一に基本的要求としての運動要求を充足すると同時に他のすべての文化的反応を可能にする。成長、健康などとは特に関係が深いと考えられる。

運動、活動に対する要求（欲求）を要求体系の中に位置づけ、論じたものはそれほど多くはない。<sup>4)</sup>「人間は本来、身体的活動に対する基本的な欲求をもち、つねにその欲求を満たすことからよろこびを感じている<sup>5)</sup>」として、必要に応じてアプリアリに前提される場合が多い。その点で、Malinowski の要求論はこれから発展させるべき要素をたぶんに含んでいるといえるだろう。

このように、スポーツは、生物学的な運動衝動が文化的に再定義された運動を中心とした基本的要求を充足するために存在する文化であるといえるが、その充足にあたっては幾つかの派生的な道具的至上命令が課せられる。経済、法、政治、教育に関する行動である。体育・スポーツ集団が存続していくためにはいかなる条件が必要になってくるのか、という問題を設定し、それに答える方法論的基礎を構造一機能分析に求めてきた。具体的には AGIL 図式 (A…Adjustment, G…Goal attainment, I…Integration, L…Latent Pattern Maintenance) を用いた体育組織の分析であるが、<sup>6)</sup> A を経済、G を政治、I を法、L を教育にほぼ対応させることができるとするなら、運動要求の充足にとっても経済、法、教育、政治に関する要件充足が不可欠であり、スポーツをするためにはまず以上の要件が満たされていなければならないことは明らかである。

換言するなら、スポーツによって運動という基本的要求を満足するためには、まず道具的パフォーマンスを構成する個々の要素、すなわち、スポーツをするために必要な物体、技術、協同または伝統、環境などの条件が保障されなければならないし、それらの要素自体が動因の対象となってくるということである。

これまで述べてきたところから明らかなように、いずれにしてもスポーツはある程度の自律性を有した一つの制度としておさえられなければならない。それは、制度の統合原理からいえば随意結

合の原理にもとづく制度であるといつてよい。

また、制度は文化を有機的に構成する要素であった。明治以来の移入に際してのスポーツの日本の変質の様相を「スポーツの武術化」に求めた研究<sup>7)</sup>や、経済的社会構成体の変遷に伴うスポーツのあり方のちがいを究明した研究<sup>8)</sup>は、文化の有機的構成要素としてのスポーツに焦点をあてたものといえよう。

次に、体育を一つの制度と規定し、それと関係の深い運動文化を構成する要素を構造化したものに、佐伯の研究がある<sup>9)</sup>(図4)。運動文化をスポーツの上位概念にとらえると、Malinowskiの

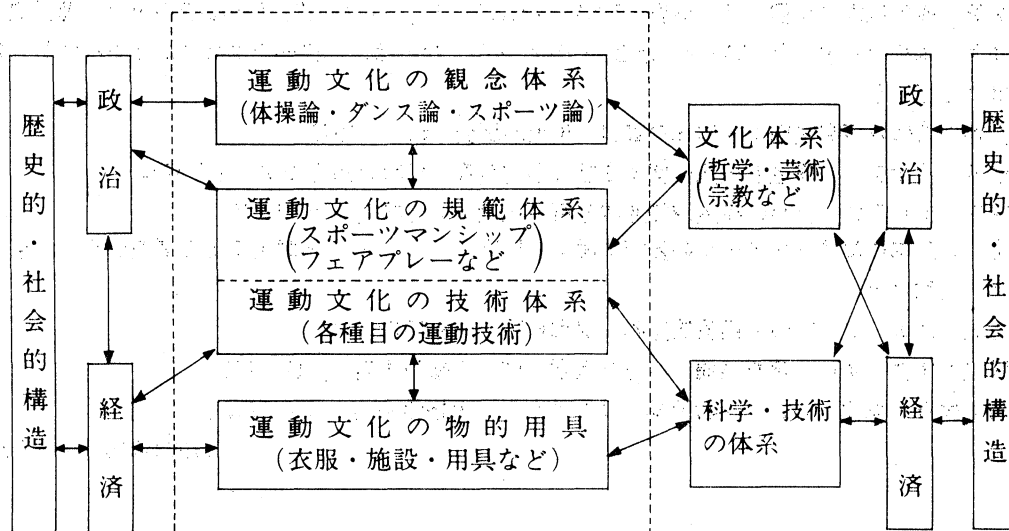


図4 運動文化の構造

いう文化の質的類別要素としての物的、行動的、精神的な要素が含まれており、Malinowskiの制度の構造との対応も明らかであろう。人的組織に対応する要素が欠落しているが、これは運動文化の客体的側面に中心をおいたためであろう。いずれにしても、スポーツはこれらの要素が有機的に結合した一つの制度として、人々に実践されることによって種々の機能を果して存在している人間文化の重要な領域であるといえる。

菅原も同じく、体育を制度ととらえて、Malinowskiの制度により一層照応する要素を列举している。<sup>10)</sup>

このように、人間の基本的要求を充足するための手段として存在するスポーツは、指導されるにあたってその制度的構造に留意されなければならない。その技術面を不当に重視した技術主義や、特定の主義を注入するためにある観念的側面を過度に強調する精神主義的な指導方法は、制度としてのスポーツの本質をおさえたものとはいえないであろう。

以上、この分野における現在までの研究成果をおりこみながら、スポーツを軸においてMalinowskiの文化論をおおまかに跡づけてきた。そこでは、Malinowskiのスポーツ文化論を筆者なりに積極的に展開させるまでには至らなかった。それについては、他の文化論の吸収につとめた後で

の課題として残しておきたい。スポーツ文化の発生の歴史性、発展の合法則性についての解明も Malinowski の文化論における盲点になっているが、この点も、Malinowski の文化論批判とあわせて残された大きな課題である。

## 注

- 1) 篠原助市：教育断想 寶文館 昭和13年
- 2) 中村敏夫：運動文化論 (I) 体育科教育 Vol.12-4 pp.62~63 1964
- 3) C.Ulrich: The Social Matrix of Physical Education Prentice-Hall, p.11, 116, 1968.
- 4) 平田久雄：運動欲求の位置づけ 体育の科学 Vol.20-5 pp.271~274 1970, 近藤充夫：運動欲求の発達と幼児 体育の科学 Vol.20-5 pp.279~282 1970 などは、本格的ではないが数少ないがものうちにはいるだろう。
- 5) 東大教養学部体育研究室編：保健体育資料 東大出版会 p.210 1971
- 6) 中島信博：「体協」の構造と機能に関する社会学的考察 東教大修士論文 昭和49年  
上杉正幸：プロ野球と社会の構造機能連関分析 東教大修士論文 昭和50年
- 7) 嘉戸脩：わが国におけるスポーツの変容に関する研究 —スポーツと武士道との関連から— 東教大修士論文 昭和44年
- 8) 山本正雄：スポーツの社会・経済的基礎 道和書院 昭和50年
- 9) 佐伯聡夫：体文と文化 菅原禮編 体育社会学入門 大修館書店 p.42 1975
- 10) 菅原禮：体育の集団 竹之下・菅原編 体育社会学 大修館書店 p.90 1972

(1978年10月16日受理)